

国際学術シンポジウムⅣ『東アジア都市文明の考古学研究(2)』の開催紀要

日本学術振興会 R3～R7 年度 科学研究費補助金・基盤研究A
「南縁・東縁地域における郡県都市の変容からみた“漢帝国の遺産”の東アジア史的意義」
JSPS 科研費 21H04367 (研究代表者 黄曉芬)

国際学術シンポジウムⅣ 東アジア都市文明の考古学研究 (2) ～城址・陵墓・祭祀～

2025年1月11日(土) 10:30~17:00

10:30	開会	司会：諫早直人(京都府立大学 准教授)
10:30~10:40	開催趣旨	黄曉芬(東亜大学 教授)
10:40~11:20	湖南省における戦国秦漢期の城址調査と認識	高成林(中国湖南省文物考古研究院 副院長)
11:20~12:00	始皇帝陵の考古学調査から古代「建中立極」の都市空間を読む	黄曉芬(東亜大学 教授)
休憩 12:00~13:00		
13:00~13:40	天地合祭：秦漢時代の時祭についての新認識	梁雲(中国西北大学 教授)
13:40~14:20	秦漢時代における墓と廟の変革	向井佑介(京都大学人文科学研究所 准教授)
休憩 14:20~14:30		
14:30~15:10	画像資料からみた漢代郡県城	森下章司(大手前大学 教授)
15:10~15:50	南京鐘山にある南朝建康城の北郊祭壇に関する考古学研究	賀雲翱(南京大学歴史系 教授)
休憩 15:50~16:00		
16:00~16:30	総合評議	妹尾達彦(中央大学 名誉教授)
16:30~17:00	総合討論	佐川英治(東京大学大学院 教授)
17:00	閉会	

オンライン開催 (Zoom) / Live 配信 (同時通訳付)

事前登録用 URL <https://us06web.zoom.us/meeting/register/tZEfu2tqDwsGNz9wgqFaUBCxQQuMoT-HG4>



主催 東亜大学東アジア文化圏形成研究プロジェクト室
問合せ先 j.x.h.project@gmail.com

開催趣旨

黄 曉芬（東亜大学）

新年早々、大変お忙しい中、本プロジェクト主催の国際学術シンポジウムへご参加いただき、誠にありがとうございます。

本日国際会議の開会挨拶の冒頭には、まず昨年暮れ、91歳で大往生された恩師・京都大学名誉教授の小野山節先生に謹んでご冥福をお祈り致します。とくに長年に亘って、本科研プロジェクトの学術調査活動を、いつも暖かく応援していただき、衷心より感謝申し上げます。

私の学問探究、東亜大学・東アジア文化圏形成研究プロジェクトの原点は、京都大学大学院時代にあり、小野山先生から学問の要領と方法論を教授していただき、東アジア文明の視野を広げました。そして、考古学研究室の先輩・後輩らと、日頃の勉強と問題討議、及び切磋琢磨の時間を費やしてきたおかげで、博士論文をまとめ『中国古代葬制の伝統と変革』（勉誠出版 2000年2月）を上梓しました。東亜大学へ赴任してから、日本学術振興会の科学研究費により、都城と陵墓を中心として東アジアの古代都市の遺跡調査、またギリシア都市遺跡やローマ帝国属州都市遺跡の実地調査を行い、東西文化比較の視点から日越協定調査、漢唐帝国南縁の交趾郡治・ルイロウ遺跡の発掘調査を計画的に推進し、10年連続調査を実施した結果、帝国南縁都市「交趾」の実像、その変遷過程を徐々に解明されつつあり、現在に至ります。

都市とは、人類社会における王権国家の成立を表わす重要な文明装置です。ここで人々が集住し、人間の生活を成り立たせる政治・経済・文化の拠点として栄え、宗教祭祀の聖地とも成られ、そして、ヒトの死後の世界を入念に創り出しました。その後背地には豊かな穀倉地帯をもつほか、需要に応じて様々なサービス・情報を提供する中心地であり、また軍事と交通・交易の要衝でした。

近年、中国考古学の学術調査と新発見が年々増え、古代中国、また東アジア都市文明の様相を理解する有力な考古資料の発見・発掘が相次いで、昨年の夏秋、陝西師範大学の海外招聘教授として、国際長安学研究院を拠点に中国滞在研究を行い、滞在期間中、各地の遺跡調査進行中の発掘現場へ赴き、城址・陵墓・祭祀遺跡の数々を実見しました。最も代表的な調査事例として、下記のものが挙げられます。

1) 早期国家の良渚古城（約5000年前、浙江省杭州市）：自然山河の利に恵まれた平野に位置し、宮殿・王墓・祭祀遺跡を中心に城壁と環濠でめぐらし、真北方位を求めた内外二重の城郭都市が築かれた。良渚古国の王墓と祭壇も発掘された。2) 戦国早期の越国王

都・王墓・祭祀基壇遺跡（約 2500 年前、浙江省安吉県）；戦国後期の越国都城・王陵・祭祀遺跡（約 2300 年前、浙江省紹興市）、後に漢代～六朝期の郡県都市遺跡も同地層で検出した。3) 漢晋期の渡頭古城（紀元前後～三国両晋期の郡県城址、湖南省臨武県）



図 1-1.良渚古城・城南の水門と城壁



図 1-2.良渚王墓(柳墓)



図 1-3.良渚瑶山祭壇



図 2-1.戦国早期の安吉古城(越王都)

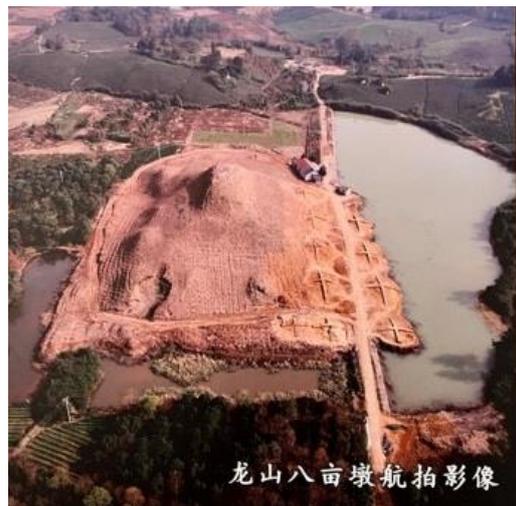


図 2-2 同左の古越王墓



図 3. 戦国後期の越国都城



図 4-1. 武王墩楚王墓



図 4-2. 楚王墓の卍字形木槨

- 3) 武王墩楚王墓（約 2300 年頃、安徽省淮南）、卍字型木槨墓
- 4) 始皇帝陵園外城東門遺跡・外城西側の大型陪葬墓
- 5) 海昏侯大墓・家族墓園（B. C. 2 世紀、江西省南昌市）
- 6) 琅琊台祭祀遺跡（山東省青島市）



図 5-1. 海昏侯墓園・国都紫金城



図 5-2. 海昏侯家族墓園・祠堂

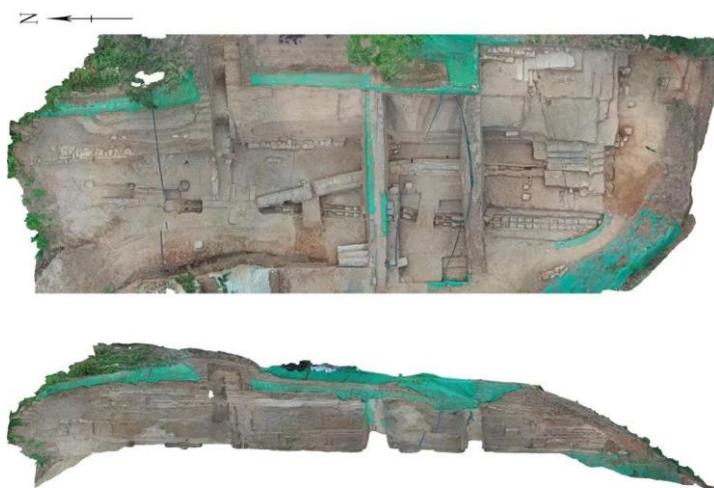


図 6. 瑯琊台祭祀遺跡

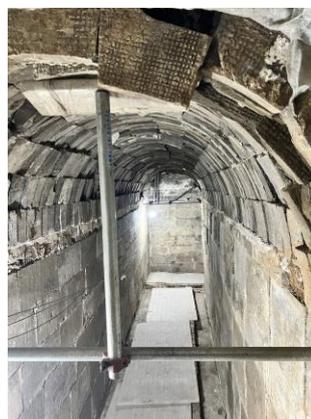


図 6. 後漢彭城王墓（前堂後室・回廊）

以上のように、昨年中国各地の遺跡調査や発掘現場巡りは、至るところ、驚きと感動の連続でした。21世紀現在では、東アジア都市文明の考古学研究の黄金期と言っても過言ではありません。これらもの凄く多彩多様な発掘資料の実見を通して、今回国際学術シンポジウムⅣ『東アジア都市文明の考古学研究（2）～城址・陵墓・祭祀～』をテーマ設定、また企画開催するきっかけとなりました。本日の国際学術会議では日本・中国の学者6名より各自の課題調査をもとに東アジア都市文明の新研究を発表していただき、本国際会議の総合評議は、中央大学名誉教授の妹尾達彦先生に担当していただき、総合討論のコーディネーターは、東京大学大学院教授の佐川英治先生に担当していただいています。本日の課題発表と問題討議を通して、東アジア都市文明の考古学研究の新展開を目指したいと思います。

本日の国際シンポジウムが無事に開催終了し、有意義な国際学術会議になるように祈念いたします。

2025.01.11日

総合評議

妹尾達彦（中央大学名誉教授・公益財団法人東洋文庫研究員）

1. 高成林（中国湖南省文物考古研究院副院長）「湖南省における戦国秦漢期の城址調査と認識」

高成林先生の本報告は、現在の湖南省の戦国秦漢期の都市遺跡の調査と考察です。まず、調査活動の背景が説明され、湖南省内における戦国秦漢城址の調査が示されます。次に、調査の結果分かった初歩的な認識として、(1) 県レベルの行政機構と地名の沿革、(2) 伝世文献の記載や、誤って考証されていた県城に関する修正事項、(3) 伝世文献の記載には見えないが、出土文献の記載に見える県城の確認、(4) 戦国末期の秦と楚の境界、楚と秦代の黔中郡・洞庭郡・蒼梧郡、および漢代の武陵郡・調査郡の関係が明示され、最後に、湖南一帯の歴史における武陵蛮の蜂起の影響が論じられました。

従来の研究の多くは、戦国秦漢期の地方都市研究の主対象を、秦漢都城の形成につながる華北の黄河流域の都市においていたので、今回の報告が、長江中流域の戦国秦漢期の都市の分析であったことに、新鮮な知的刺激を受けました。特に、戦国秦漢期の湖南省の河川流域に既に多数の城址が造営されており、現在の都市に継承されていることから、中国大陸の都市史の原型が、戦国秦漢期に形成されたことを示しているように感じます。

感想と質問は、以下の通りです。

(1) 湖南省における戦国秦漢期の城址の地域的特色を、同じ長江流域の他の城址と比較して分析することは可能なのでしょうか？

(2) 長江流域の都市を、自然・政治・経済環境の異なる黄河流域の都市と比べて分析することは、研究史の現段階で、どこまで可能なのでしょうか？

2. 黄 曉芬（東亜大学教授）「始皇帝陵の遺跡調査から古代「建中立極」の都市空間を読む」

本報告は、黄曉芬先生の長年にわたる都城・陵墓研究の一つの到達点を示す内容だっただと思います。まず、始皇帝陵の選地と方位景観を、始皇帝陵の選地と方位設定、「建中立極」の方位思想の順に説明されました。次に、墳墓祭祀の確立と題し、地上の巨大墳丘と陵園建築群、祭祀寝殿・便殿建築群、地下の埋葬施設を紹介されました。

続けて、発掘からみた始皇帝陵の実像の分析に入り、麗山陵の地下軍団の存在を秦陵の兵馬俑 1 号坑から述べ、内城南区の陪葬坑の発掘現状を、出土した銅車馬坑・百戲俑坑・水禽坑・祭祀遺跡出土「楽府」鐘から明らかにし、始皇帝陵の大型陪葬墓の特色、始皇帝陵北側の陵邑(麗邑)建築群について明らかにしました。

秦始皇帝陵の復原をめぐる研究が、近年著しく進展してきたことが、今回の報告で実感できました。まさしく、現時点における研究の到達点を示していただけたと思います。

感想と質問は以下の通りです。

(1) 秦始皇帝陵の真北方位にもとづく grid plan が必要とされた歴史背景について、改めて、初歩的な問いかけをしたいと思います。秦始皇帝以前にも大規模な陵墓は存在していますが、これだけ整然とした大規模な陵墓が存在していません。その理由は、どこにあるのでしょうか。

(2) なぜ、始皇帝陵の墳丘が、長方形の内外城の中央におかれずに南側に偏っているのか、という問題について、どう考えればよいのでしょうか。墳丘が中央に置かれれば、兵馬俑坑と東西軸に立地します(鶴間和幸『始皇帝の地下宮殿―隠された埋蔵品の真相』東京：山川出版社、2021年、26頁参照)。これは、地形の高度差にもとづくのか、あるいは他の要因があるのでしょうか。

3. 梁雲(中国西北大学教授)「天地合祭：秦漢時代の時祭についての新認識」

秦漢の国家祭祀の重要な舞台としての時(「西時」「雍五時」と時の祭祀が、『史記』封禪書・『漢書』郊祀志等に記されています。この時と時祭について、近年における発掘と文献調査にもとづき、研究の現段階を明らかにした報告でした。

今世紀に入り、甘肅省礼県鸞亭山・陝西省鳳翔雍山血池・宝鶏陳倉呉山・宝鶏陳倉下站などの地点で、秦漢時代の時祭と関連する遺跡が発見され、時祭研究が新たな材料を得ることとなったことが、明らかにされました。このうち、甘肅省礼県鸞亭山の遺址が天をまつる祭天の場所であり、陝西省鳳翔雍山血池・宝鶏陳倉呉山・宝鶏陳倉下站が、地をまつる祭地の場所であることを推定します。

秦漢時代の時祭は、前漢末の祭祀改革によって儒教の解釈にもとづく国家儀礼が成立する以前の国家儀礼の場として、重要な意義があります。今回の梁雲先生の報告は、政治史や国家儀礼史、思想史の上で、とても重要だと思います。

感想と質問は、以下の通りです。

(1)祭天の場所として、甘肅省礼県鸞亭山が選ばれ、祭地の場所として、陝西省鳳翔雍山血池・宝鶏陳倉呉山・宝鶏陳倉下站が選ばれた理由は、どこにあるのでしょうか。天と地の祭壇の選定には、自然環境や当時の政治状況が関連しているのでしょうか。

(2)王莽による儒教にもとづく国家儀礼の改変後の「西時」と「雍五時」の思想史上の位置づけについて、どう考えればよいのでしょうか。後漢に奠都した後の「西時」「雍五時」の祭壇は、どうなっていたのでしょうか。

4. 向井佑介（京都大学人文研准教授）「秦漢時代における墓と廟の変革」

向井先生の本報告は、秦漢時代における墓と廟の変革を系統的に分析することで、墓と廟の関係史を整合的に把握する道筋を明らかにしました。まず、考古学からみた先秦時代の宗廟を述べ、秦始皇帝陵の陵園建築、前漢陽陵の陵園建築、前漢皇帝陵における廟と寝の位置、漢代宗廟の構造と思想という順に論じ、中国の国家儀礼の核心をなす墓と廟の制度が、秦から前漢にかけて整備されていく過程を論じました。

感想と質問は、以下の通りです。

(1)秦の始皇帝が廟から寝（墓の側）を分離したのではなく、先秦時代から民間習俗として墓祭がすでに存在していたとすると、蔡邕『独断』は、なぜ、始皇帝から墓と寝が分離すると説いたのでしょうか。

(2)先の梁雲先生の報告への質問と重なるのですが、前漢末、特に王莽による儒教の解釈にもとづく長安の礼制建築の造営は、長安の都城としての権威を高めるために行われたと思いますが、王莽による礼制改革は、従来の皇帝陵の陵園の礼制建築と、どのような関係にあったのでしょうか。

5. 森下章司（大手前大学教授）「図像資料からみた漢代郡県城」

漢代郡県城を描く和林格爾壁画墓を手がかりに、漢代の郡県城の実態を鮮やかに明らかにする森下先生の本報告は、和林格爾壁画墓の図像のもつ重要性を、改めて明らかにする内容でした。

まず、和林格爾壁画墓の図像にもとづき、和林格爾壁画墓と被葬者、寧城図、寧城の構造、離石・土軍・繁陽・武成城図の順に論じ、最後に、郡県城の構造と性格を整理しました。漢代の郡県城の状況を視覚的に復原することのできる和林格爾壁画墓は、他に類例をみない資料的価値をもっていることを、改めて実感する報告でした。

感想と質問は、以下の通りです。

- (1) 和林格爾壁画墓以外にも、漢代の地方都市を復原できる壁画が存在するのでしょうか。
- (2) 和林格爾壁画墓で復原できる地方都市の政治・生活情景は、当時の長城地帯に接する都市であれば、通常見られる風景と考えてよいのでしょうか。漢代の地方都市の比較研究に、どこまで、一般化できるのでしょうか。

6. 賀雲翱（南京大学歴史系教授）「南京鐘山にある南朝建康城の北郊祭壇に関する考古学研究」

南朝建康の考古学的研究を先導されてきた賀雲翱先生による本報告は、南朝建康城の北郊祭壇遺址の分析という、魅力に満ちた内容でした。まず、考古学的発見を披露され、次に、判明・推定できることとして、遺址の年代、構造、地形と方位、出土遺物が、順番に整理されました。最後に、北郊祭壇遺址の歴史的な性格と意義について論じられています。従来、正確な場所の不明だった北郊壇が判明したことは、今後の南朝建康における国家祭祀や建康の都市空間の研究に、少なからず影響をあたえると思います。

感想と質問は、以下の通りです。

- (1) 建康の北郊祭壇は、北朝の北郊祭壇と比べた時に、どこに特色があるといえるのでしょうか。
- (2) 隋唐長安城の北郊祭壇の遺址が、近年、隋唐長安城の禁苑の中に発見されました。南朝の北郊祭壇は、後代の北郊祭壇にどのような影響をあたえたと考えられるのでしょうか。

全体の感想と残された課題ーグローバル・ヒストリーの観点からー

今回のシンポジウムは、冒頭の黄曉芬先生の開催趣旨でも述べられたように、東アジア都市文明の考古学研究という大きな題目のもとの討論が求められています。今回の各報告は、それぞれ、東アジア都市文明の実態を照射する内容でした。

そこで、非常に粗い内容となりますが、最後に、本シンポジウムの全体の議論について感想を、ユーラシア大陸東部の歴史の中に位置づけ、述べさせていただければと存じます。

本日のシンポジウムの報告は、前 1000 年紀から後 6 世紀におよぶ、中国大陸の古典文化の形成と変革期の時代状況を、都市を主対象に分析したものです。ここで、主に論じられた問題は、戦国秦漢期から南朝における行政都市網の確立（高成林・森下昌司報告）と、都城の制度の形成（黄曉芬・梁雲・向井佑介・賀雲翱報告）の関連でした。

一つの問題は、本日のシンポジウムで論じられた行政都市網や都城の制度が、その後の中国大陸において、どのように継承され、変容したのか、という問題です。秦漢で基盤を確立した中国の古典文化は、4~7 世紀のユーラシア大陸規模の人間移動と文化融合のもとで変動を余儀なくされます。賀雲翱先生が明らかにされた南朝建康の北郊祭壇の造営は、この変動期の一つの現れだと思えます。

伝統と革新は、どの地域にも現れる歴史の普遍現象です。7~8 世紀の都市史を研究してきたものとして、今後の東アジア都市文明の考古学研究が、隋唐以後のユーラシア東部の歴史の展開を含め、多角的に分析する方向で進んでいただければと願います。前 1000 年紀における秦漢古典国家で構築された中国古典文化の伝統が、4~7 世紀の変動によって、どの程度、どのように変容するのか、という問題は、古くて新しい問題であることを、本日のシンポジウムを聴講することで、改めて認識しました。充実した報告を担当された先生方に、心から御礼を申し上げます。

国際学術シンポジウムⅣ『東アジア都市文明の考古学研究』の開催記録

本国際会議のオンライン参加・事前登録者数： 178 名（日・中・韓・越の 4 ヶ国）

開催当日のオンライン参加者数： 123 名（日・中・韓・越）

東亜大学本部会場への出席人数： 22 名

以上、2025. 01. 11（土）国際学術シンポジウムⅣの参加者数合計： 145 名



東亜大学本部会場・オンライン会議/live 配信のホスト局



左上) 会議事務局・ホスト局(大川氏), 発表者・賀雲翱氏, 森下章司氏,
左下) 梁雲氏, 総合評議・妹尾達彦氏・佐川英治氏, 高成林氏



本部会場：白浪澎/通訳, 諫早直人/司会, 向井佑介・黄曉芬/発表者, 呉心怡/通訳



東亜大学本部会場： 司会・発表者，来場者



東亜大学本部会場の昼休み



午後の部：発表・総合評議・討論会



閉会、そして再見！